The Association of Art Education Newsletter

美術科教育学会通信 No.109 2022.02.20

□巻頭言 □第 44 回 東京大会予告（最終案内） □臨時理事会報告 □リサーチフォーラム予告
□花篤實先生を悼む □書評 □編集後記 □本部事務局より

巻頭言

学術研究組織としての整備と発展を目指して
−新型コロナウィルス禍での活動を振り返る−

代表理事　山木朝彦（鳴門教育大学）

1. 沿革の確認と「美術科教育学会２０年史」の公開

第 11 期理事会は 2019（平成 31）年の 4 月から活動を開始した。本学会の活動を注意深く見つめていただいている会員は，この冒頭の「第 11 期」という言葉に首をかしげ，疑問を抱くにちがいない。なぜなら，私自身，運営全般の役割を受け継いだ時点では，この期の理事会は，「第９期」なのだと信じていたからである。なぜ，都合２期ものズレが生じたのか。このことについて，簡単に記しておきたい。

常々，美術科教育学会の歴史をホームページに掲げたいと考えていたこともあり，この学会がいつから始まり，どのような紆余曲折を経て，今日に至ったかを「美術科教育学会２０年史」(1999（平成 11）年 3 月 26 日発行）を紐解いて，耽読していた機会に，本学会における第〇期という言い方に興味を覚えたのである。

「美術科教育学会２０年史」には発足について，編纂委員執筆による貴重な次の記述がある。

「昭和 53（1978）年 11 月に広島で開かれた第 17 回大学美術教育学会の休憩時間に会場の片隅で，鈴木寛男と大勝恵一郎が同学会に参加していた各地の国立大学の美術科教育担当教官達に美術科教育専門の研究会の結成を呼びかけたのが，本学会の原点である。（中略）鈴木・大勝両氏の提案は翌年 3 月に奈良教育大学での第 1 回大学美術教科教育研究会として実現した。」（５頁）また，17 頁には大橋皓也による「学会化の提案」という一文があり，このなかで学会の始まりが次のように語られている。

「大学美術教科教育研究会を美術科教育学会として改組し，正式に学会になって初めて開かれたのが，大阪教育大学の主管で行われた 1983 年の第 5 回大阪大会であった。学会誌も「大学美術教科教育研究会報告」から「美術教育学」とし，その学会としての学的スタンスを明確にした。」さらに，26 頁には上記引用の傍証となる次の記述が編纂委員によって記されている。

「昭和 57（1982）年 3 月 13 日の第 4 回大学美術教科教育研究会の協議会で学会名称，学会誌名称，学会規則が審議決定され，美術科教育学会は同日付けで発足した。会則に役員として会長，副会長，常任理事，評議員が規定されたが，付則を作って当分の間会長ではなく代表理事を置くことにした。そして鈴木寛男がその任に就くことになった。結局，以後会長は選出されることなく平成 3（1991）年の選挙制度発足に伴う規則改正によって廃止され，代表理事，副代表理事が正式の役員として規定された。」

「美術科教育学会２０年史」は本学会屈指の歴史研究者である金子一夫によって編まれた労作であり，本学会の功労者達による時代の証言が多数含まれている。その文献から引いた上記の叙述から，本学会の性格が 1982 年から翌 83 年に大きく変質したことが分かる。

このような認識のもとに，大学美術教科教育研究会の時期を第 1 期としてまとめ，全会員による選挙によって任期 3 年（再任を妨げない）の代表理事選出の仕組みができた時期からを第 2 期と呼ぶならば，現在は第 11 期となるのである。

ちなみに，第 10 期までの「代表理事」（当初は「代表」）の氏名を記述すると次の通りである。鈴木寛男・宮脇 理・宮脇 理（再選）・花篤 實・柴田和豊・橋本泰幸・藤江 充・金子一夫・永守基樹・水島尚喜。

ではいったい，なぜ「第 11 期」を「第９期」と呼ぶ慣例が生じていたのか。これは推測の範囲を出ないが，選挙を実施した後の理事等役員組織の改組の回数に準拠し，さらに，再選によって２期６年間を務めた宮脇

代表理事の期間を 1 期分として数えるという，かなり変則的な数え方に依拠した結果だと思われる。

第何期という呼称に大きな意味はないと考える会員もいるかもしれないが，1979（昭和 59）年から始まる本学会の沿革を考える際には，重要なコンセプトになるであろう。

ところで，繰り返し参照した「美術科教育学会２０年史」は，現在，本学会のサイトに全文が掲載されている。これは，ひとえに事業部担当の大泉義一副代表理事の尽力の賜である。この資料は素晴らしい内容であるにもかかわらず，紙媒体で冊数が限定され配布の範囲も限られていたため，新規の会員の目に触れることがなかった。したがって，今期の事務局においてサイトに掲げることを私は使命と考えていたが，大泉も全く同じ考えであり，役職就任後直ぐに公開に向けて彼は動き始めた。執筆者全員の了解を得るというその丁寧な段取りには，学ぶべき点が多々あった。とくに物故者への対応は困難を極めたようだが，彼は最善を尽くしている。

2. 事業部活動内容の飛躍的発展

ここからは，事務局を構成する総務部・研究部・事業部というセクションがこの 3 年間にいかなる運営を行い，組織上の改革や発展に努めたか，また，重要な役職に就いた理事の活動はいかなるものであったか，学会運営の「見える化」のためにも，報告を行いたい。前節の話の流れから，事業部から報告を始めよう。

私は会員の一人として，事業部を構成する理事から数多くの恩恵を受けたと考えている。

特に，学術情報担当の上山 浩理事には，学会誌論文の情報公開に関わる J-STAGE（科学技術情報発信・流通総合システム）への論文情報提供について，画像マスキングを含む各種著作権処理のチェックを担って頂いた。上山理事のご尽力によって，J-STAGE を通じて，「美術教育学」40 号までの掲載論文が一般に公開され，国内外の学術の発展に少なからず寄与している。

また，美術科教育学会の InSEA 正式加入に伴う「美術教育学」の英文名称（*The journal for Japanese Association of Art Education*）の J-STAGE への通知も上山理事に行って頂いた。なお，この英文名についての国立情報学研究所 CiNii 担当者への通知および国立国会図書館（NDL）サイドへの通知は，私自身が行い，首尾良く，情報更新を行うことができた。

このほか，上山理事には，会員から寄せられた著作権絡みの問い合わせについて，幾度となく相談をし，その都度，妥当な判断を頂いた。この 3 年間，本学会が著作権関係の係争に巻き込まれず，会員の権利が守られたのは，上山理事のご見識に負うところが大きい。

事業部は，本学会の学会内外への広報を中心にした情報発信の役割を担うことから，学会サイト＝ホームページの管理・運営・更新に深く関わっている。

水島尚喜代表理事の在任期間である改正 10 期（旧 8 期）におけるその役割は，その多くを上山理事が行い，部分的に当時の事務局が受け持っていた。ゆえに，この時期，事業部副代表理事だった私は，リサーチフォーラムの運営・サポートに専念することができた。

今期は事業部を統轄する大泉副代表理事がサイトへの情報集約と内容更新という業務をほぼ一括して担うことで，きわめて迅速な情報発信を行うことができた。

現代のネット社会に柔軟に適応した大泉副代表理事の力量は，彼自身が考案した新企画「リサーチフォーラム・オンライン」でも発揮された。計３回組まれたこの企画のうち，すでに２回実施されているが，いずれも参加者数が多く，好評のうちに終了している。今後はこの「リサーチフォーラム・オンライン」が通常のリサーチフォーラムに加わり，その時々のタイムリーな研究テーマを共同討議する場になるにちがいない。

事業部が関わる活動内容は幅広く，各部会についての研究促進や対外的組織との交流など多々あるのだが，本稿では省かせて頂く。

3. 未来への展望を拓いた総務部の活動内容

次に総務部の活動内容について振り返りたい。まず最初に記録として残すべき事柄として，研究大会に関わる計画立案と実施のための枠組み作りが上げられるだろう。

年１回 3 月に開催される全国規模の研究大会を引き受けて頂き，大会事務局となる大学を見つけるのは，旧来，代表理事に課せられた義務であった。そういう慣例があったのである。

水島尚喜前代表理事に相談しつつ，私自身，複数の大学に直接交渉したが，最終的には条件が折り合わずに挫折。不安な日々を過ごしていたところ，私の窮状を察してくれた佐藤賢司総務部副代表のご尽力により，愛媛大学が大会開催を引き受けてくれた。

ところが，ご存知の通り，新型コロナ感染症の蔓延によって，人々が参集する通常の研究大会の開催は不可能となった。その結果，2020（令和 3）年度の第 43 回美術科教育学会愛媛大会（2021 年 3 月 27～28 日）は全て，リモートの形態による開催になった。

この大会については，大会実行委員長の秋山敏行が学会通信 107 号（2021 年 6 月 20 日）のなかで，「まさか，昨年の今頃は 1 年経過してもなお，緊急事態宣言の発出があろうとは思いもよらなかったことです」と述べている。この言葉からも，リモートの形態に切り替えるための大会事務局の苦労は想像に難くない。

しかし，同文の終わりに，遠隔授業を求められる困難な時代だからこそ，図画工作や美術の「原点に立ち返る・原点を問い直す」（愛媛大会の大会テーマ）が重要となると秋山大会委員長は説く。私も同感である。

こうした想いは，総務部を統括する佐藤賢司副代表理事によって，すでに先取りされたかたちで，2020年10月20日に発行された学会通信105号の巻頭言の中で次のように書かれていた。

「授業の「方法」が取りざたされています。コロナ禍がその議論を深めたことは間違いありません。けれども，よく見られる「差し迫った状況への対応事例を語ること」と，「なにが問題であるべきかを語ること」は必ずしも同一ではありません。」

物事の本質を見極める思考から生まれた含蓄のある言葉である。このことに象徴される通り，未来を見通す資質に恵まれた佐藤賢司副代表理事が総務部の仕事を担ったことで，今期の運営は非常に潤滑に行われた。

総務部というセクションは，各部署から上がってきたルーティン的事業や新企画に対して，各々の必要経費を適切な費目に位置づけ，理事会の承認を受けなくてはならない。それだけではなく，歳入・歳出の釣合いや会員の入会・退会などに伴う会員数などの動向，さらに，理事会の開催についても，具体的な日時や場所決めのために，各理事からご都合を伺い，調整を図るなど，重要な業務が目白押しである。

このような多面的な仕事の全てに，それぞれの価値を吟味し，将来的展望を抱く能力が求められことは言うまでもない。所属する大学の附属学校長という激務に就きながらも，この難しい仕事を佐藤賢司副代表理事は計画的に進め，学会運営の要となる総務部の役割を全うした。また，事務局構成員の渡邉美香理事と新井 馨会員の緻密な仕事ぶりが総務部の運営に安定感を与えてくれたことも明記しておかねばならない。

研究大会の話に戻るが，昨年度の愛媛大会に続き，今年度の明治学院大学主催の東京大会の決定，そして，次年度の開催形態のアウトライン立案など，前途に目処が立ったのも佐藤副代表理事の尽力の賜である。数多くの若手研究者から慕われている彼の人格的魅力や指導力が実を結んだものと私は考えている。

総務部に位置づけられている学会通信の編集は，竹内晋平理事が当たった。彼はその理知的なアプローチによって，執筆者への原稿依頼と校正上のやりとりを滑らかに行い，学会通信を定期に発行した。

また，彼の尽力により，これまで紙媒体だった学会通信の「郵送」は，サイトベースの「配信」に替わったのだが，これによって，顕著なコスト削減だけでなく，情報共有の即時性が実現できた。

4. 盤石の構えで研究活動を支えた研究部の活動内容

研究部は学術学会として最も重要な学会誌論文集「美術教育学」の発行に関わる全ての仕事を担うセクションであり，学会誌編集委員会もまた研究部によって組織されている。理事総数の21人中11人がこの研究部に所属していることからも，研究部の重要性が伺えることだろう。その中枢で円滑な運営のために采配を執った研究部統括の宇田秀士副代表理事は，学会誌への掲載論文数・科研費採択数共に多く，研究部代表にふさわしい研究者である。

彼は，期日までに学会誌を発行するために，徹底したスケジュール管理に努め，予想外の乱流が起こり易い論文投稿・査読・修正などのプロセスを最適化し，学会誌の質的向上を成し遂げた。

また，本学会の大黒柱のひとりとして，会則や複数の細則に精通し，歴代の代表理事とのコンタクトを絶やさず，複雑な問題の解決を図った。

おわりに：3年にわたる運営において心掛けたこと

小さな大学で，美術のコース長や部長（総合大学の学部長相当）の経験しかなかった私は，美術科教育学会という，それなりに大きな組織の運営の責任者となり，各セクションを束ねていく自信が無かった。

ただ一つだけ，実現したかったこと，心掛けたことは，運営プロセスの「透明化」である。それは，本学会の意思決定の過程をまるごと裸にし，誰からもチェックを受けられるようにすることが，民主的運営の要となるという思いに端を発していた。冷静に考えれば，このささやかな願望が，サイトと学会通信での報告や案内の充実，そして現理事会での審議の充実に結びつくのは必定であった。

そして，本学会の成果を内外に知らしめるためには，InSEAへの正式加盟や「教科教育学コンソーシアム」への加盟はむしろ当然のことであった。これら重要な案件を理事会に諮り，新たな会議形態であるZoomやメールによる審議・検討を経て，妥当な結論を導き出すこともできた。総会での審議・報告については，メールによる集約という方法的制約はあったものの，開かれたかたちで実施することができた。

最後に，学会研究叢書委員会委員長という重責を担っていただいた直江俊雄理事と，今期のみ，アドホックに依頼した諮問型の四つのワーキング・グループ（「学会の質的改善のためのワーキング・グループ」：詳細略）の長を務めて頂き，精力的に調査・検討をしていただいた水島尚喜理事，中村和世理事，赤木里香子理事，神野真吾理事（順不同）に，心から感謝申し上げたい。

そして，理事会と距離を置き，厳正な目でこれをチェックすることで，学会に寄与する監事を務めて頂いている新井哲夫，山田一美両氏に御礼申し上げたい。

同じく，現行の規約に基づき，次期理事選出のための選挙を実施して頂いた，選挙管理委員会委員長の内田裕子氏に感謝申し上げる次第である。

厳正な中立性を貫けた点で，理想的な実施形態であったと言えよう。

東京大会予告（最終案内）

第 44 回 美術科教育学会 東京大会

大会実行委員長　手塚千尋（明治学院大学）

第 44 回美術科教育学会　東京大会 令和 4 年（2022）年 3 月 5 日（土）・6 日（日）
大会テーマ　「美術教育 2030―社会との結び目をデザインする」

新年を迎え，新たな 1 年がスタートしました。COVID-19 の感染拡大と縮小，それに伴う制限と緩和で更新されていく「日常」に不安や閉塞感を覚えながらも，社会システムや人々の価値観が大きく揺さぶられ，かき混ぜられたことから，より良い世界を希求し実現していこうとする動きも感じられます。美術教育の「これまで」をふりかえりながら，「これから」にどのように貢献できるのか。本大会テーマ「美術教育 2030―社会との結び目をデザインする」で皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

第 44 回美術科教育学会　東京大会開催概要

■会期　2022 年 3 月 5 日（土）・6 日（日）
■会場　オンライン開催
◆大会 Web サイト：https://confit.atlas.jp/artedutyo2022（※閲覧には参加登録が必要です）
◆大会参加登録サイト：https://artedu.confit.atlas.jp/login

↑大会 Web サイト
ＱＲコード

↑大会参加登録サイト
ＱＲコード

■学会参加費
東京大会では，参加費を徴収します。（早期割引き期間は 2022 年 1 月 7 日で終了しました）

	通常期間
	2022 年 1 月 8 日～2022 年 3 月 6 日
正会員	4,500 円
非会員	5,500 円
学生・大学院生等	2,500 円

◆参加登録について

- 参加登録期限は決済方法によって異なります。
- 参加登録期限（オンラインによるクレジット決済）：2022 年 3 月 6 日(日) 9：00 まで
- 参加登録期限（銀行振込による決済）：2022 年 2 月 25 日(金)まで ※ご注意ください※
- https://artedu.confit.atlas.jp/login より，①Confit 共通アカウント作成，②大会用アカウントの作成，③支払いの手順で参加登録を完了してください。
- 登録後，「参加登録受付メール」が届きますのでご確認ください。

◆参加費の支払い方法について

- 支払いは以下の 2 つの方法からお選びいただけます。

① オンライン決済（クレジットカードのみ）：VISA，MasterCard，JCB，AMEX，Diners Club

- 参加登録後，個人アカウントよりオンラインによるクレジット決済ができます。
  ※クレジット決済を選択すると個人アカウント内での領収書発行が可能となります。

② 銀行振込による決済

- 参加者氏名と振込者氏名を必ず一致させてください。
- 領収書が必要な方は，参加費の振り込み後に下記フォームより申請してください。
- https://forms.office.com/r/ax00e7cMhR（2022 年 3 月 6 日（日）23：59 まで）

【振込先】
銀行名：三井住友銀行
支店名：荏原（えばら）支店
口座番号：普通・1331117
名義：イリヤマ ミオ

■大会に参加されるみなさまへのお願い

事前準備について

① Ｚｏｏｍアプリのインストール

- 当日のライブ配信はＺｏｏｍを使用します。アプリがインストールされていなくてもブラウザーからご参加いただけますが，ご使用のブラウザーによっては参加できない場合もありますので以下のテストサイトで事前にご確認下さい。
  - Ｚｏｏｍテストサイト： https://zoom.us/test
  - Ｚｏｏｍアプリダウンロード：https://zoom.us/download#client_4meeting

② Ｚｏｏｍアプリ最新版へのアップデート

- 既にアプリがインストールされている方も，最新版にアップデートしてご参加ください。
  - Ｚｏｏｍアップデートについて：https://support.zoom.us/hc/ja/articles/201362233

③ 使用端末のＯＳについて

- 当日Ｚｏｏｍにアクセスされる端末のバージョンがＺｏｏｍに対応しているかをご確認ください。
  - システム要件について：https://support.zoom.us/hc/ja/articles/201362023

当日について

① 回線不具合時について

- 当日の Zoom を使用したライブ配信は，開催大学のインターネット環境を使用して行います。また，発表者や視聴者はそれぞれのネット環境からアクセスするため，双方の回線の状況などにより画像や音声が乱れる場合があります。状況によってはライブ配信が切断され再接続して再開する場合も想定されますが予めご了承ください。

② 参加資格について

- 参加登録をされた方のみご参加いただけます。参加登録時のＩＤ，パスワードの第三者への提供はご遠慮いただきますようお願い申し上げます。
- Keynote，口頭発表，ポスター，展覧会を視聴・閲覧するためには参加登録が必要です。大会Ｗｅｂサイトは大会会期中に閲覧制限が掛かりますので，参加登録時に登録したメールアドレスとパスワードによるログインが必要になります。お手元にご準備ください。
- 大会２日前から発表者の抄録，予稿を閲覧できます。

③ 録画・録音等について

- ご参加いただく全ての方に，会期中に配信される発表の録画，録音を禁止しております。ご理解いただきますようお願い申し上げます。

■大会日程

● 大会スケジュール

１日目

	オンデマンド	オンデマンド	ライブ配信（ウェビナー）				
			A 会場	B 会場	C 会場	D 会場	E 会場
10：00～	展覧会	ポスター	開会式				
10:30～12:00				Keynote1			
12:00～13:00			昼休憩（40 分間）				
12:40～14:10				Keynote2			
14:10～14:30				休憩			
14:30～16:40				Keynote3 ＋アフター トーク			
16:40～18:10			休憩／部会準備				
17:00～18:30			研究部会				

２日目

	オンデマンド	オンデマンド	ライブ配信（Zoom）				
			A 会場	B 会場	C 会場	D 会場	E 会場
9：00～9：30	展覧会	ポスター	口頭発表A-1	口頭発表B-1	口頭発表C-1	口頭発表D-1	口頭発表E-1
9：40～10：10			口頭発表A-2	口頭発表B-2	口頭発表C-2	口頭発表D-2	口頭発表E-2
10：20～10：50			口頭発表A-3	口頭発表B-3	口頭発表C-3	口頭発表D-3	口頭発表E-3
10：50～11：10			休憩（２０分）				
11：10～11：40			口頭発表A-4	口頭発表B-4	口頭発表C-4	口頭発表D-4	口頭発表E-4
11：50～12：20			口頭発表A-5	口頭発表B-5	口頭発表C-5	口頭発表D-5	口頭発表E-5
12：20～13：10			昼休憩（４０分）				
13：10～13：40			口頭発表A-6	口頭発表B-6	口頭発表C-6	口頭発表D-6	口頭発表E-6
13：50～14：20			口頭発表A-7	口頭発表B-7	口頭発表C-7	口頭発表D-7	口頭発表E-7
14：30～15：00			口頭発表A-8	口頭発表B-8	口頭発表C-8	口頭発表D-8	口頭発表E-8
15：10～15：40			予備枠	予備枠	予備枠	口頭発表D-9	予備枠
15：50～			閉会式				

● Keynote ／ https://confit.atlas.jp/guide/event/artedutyo2022/static/keynote

社会の変化，アートの変容，美術教育はどこへ

開催日時：2022 年 3 月 5 日（土）10:30～16:40

実施形態：ライブ配信（ウェビナー）

Keynote 1　10：30～12：00

社会の変化とアートの変容

神野真吾　（千葉大学／モデレーター）

小松佳代子（長岡造形大学造形研究科）

山本高之　（アーティスト）

Keynote 2　12：40～14：10

多様性と美術教育：障害×アートが拓く身体の表現の学びの可能性

茂木一司　（跡見女子学園大学／モデレーター）

石田智哉　（立教大学現代心理学研究科・映画監督）

森田かずよ（ダンサー・俳優）

Keynote 3　14：30～16：00

グローバリゼーション時代の美術教育：現状と課題の共有をめざして

西村徳行　（東京学芸大学／ モデレーター）

福本謹一　（兵庫教育大学名誉教授）

佐藤真帆　（千葉大学）

アフタートーク　16：10～16：40

全登壇者

※Keynote は一般公開されます（有料）。

※詳細は https://artedu-tokyo-keynote.peatix.com/view に順次公開します。

● **ポスター発表**

開催日時：2022 年 3 月 5 日（土）10：00～6 日（日）14：20

実施形態：オンデマンド配信（大会Ｗｅｂサイト上で閲覧，コメント入力可）

佐賀県障害者芸術文化活動支援センターの取り組み－文化芸術へのアクセシビリティ向上に向けて

大江 登美子[1]，大石 哲也[2]（1.佐賀女子短期大学，2.佐賀県障がい者芸術文化活動支援センターSANC）

創造的思考力の育成を目指す教材の開発①導入機器の検討と試行

白石 恵里 （大分県立芸術文化短期大学）

中国におけるろう学校の美術教育に関する研究動向と課題

劉 錡洋（広島大学大学院人間社会科学研究科）

「自分らしさ」をテーマにした中学校美術科の題材開発

茂木 克浩 （足利短期大学）

教員養成系大学間によるアートプロジェクト型カリキュラムの開発① ―“身近ではない自然素材”としての流木を用いた芸術に基づく探究の展開と考察―

手塚 千尋[1]，岩永 啓司[2]，吉川 暢子[3]，根本 淳子[1]（1.明治学院大学，2.北海道教育大学旭川校，3.香川大学）

教員養成系大学間によるアートプロジェクト型カリキュラムの開発② ―“感覚をひらく”ことをねらいとした芸術に基づく探求活動の学習環境デザイン―

吉川 暢子[1]，岩永 啓司[2]，手塚 千尋[3]，根本 淳子[3]（1.香川大学，2.北海道教育大学旭川校， 3.明治学院大学）

● 展覧会

開催日時：2022 年 3 月 5 日（土）10：00～6 日（日）14：20

実施形態：オンデマンド配信（大会Ｗｅｂサイト上で閲覧，コメント入力可）

大学と美術館との連携事業「ヨリ・ミチ図工室」の成果と課題

五十嵐 史帆[1]，小川 果歩[2]，趙 静[2]，横尾 夏奈子[2]，佐々木 百花[2]，村松 慶孝[2]，伊藤 舞実[3]（1. 上越教育大学，2. 上越教育大学大学院，3. 小林古径記念美術館）

泥団子の組み立てによる人体塑造 “Maeshiba Method of Modeling Mass”

作品題目：≪葦Ⅱ≫（第 8 回日展，会員出品 於・国立新美術館）

前芝 武史（兵庫教育大学）

《雨を待つ。少しずつ頂く。取りすぎないこと。返すこと。》記録映像，2021

喜多村 徹雄（群馬大学共同教育学部）

幼児期における音楽と造形，身体表現の根源的同質性をテーマとしたプロモーションビデオ「STEPDANCE」

石賀 直之（東京造形大学）

● 研究部会

開催日時：2022 年 3 月 5 日（土）17：00～18：30

実施形態：部会ごとに Zoom 開催

- 部会ごとに Zoom で開催します。
- 参加申込の方法や開催概要は https://research-groups.peatix.com/view に順次公開していきます。
- 本部会は学会会員・非会員を問わず参加可能です。
- 第 44 回大会では以下の部会が開催されます。

  授業研究部会
  美術教育史研究部会
  乳・幼児造形研究部会
  インクルーシブ美術教育研究部会

● 口頭発表

開催日時：2022 年 3 月 6 日（日）9：00～15：40

実施形態：ライブ配信（Zoom，質疑応答あり）

	A会場	B会場	C会場	D会場	E会場
① 9:00-9:30	自己肯定感を高め，互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成に関する教育実践研究 ーコロナ禍における朝鑑賞及び表現の活動を通してー 青木善治 滋賀大学	情動の媒介性に着目した学習環境デザイン研究Ⅲ 守屋建 東京学芸大学附属小金井小学校	Global Media Arts Educationと映像的触覚知の認知課程から考える映像メディア教育 佐原理 徳島大学	戦後日本の教員養成大学・学部における美術教育学研究成果（第一報）—美術教育学研究の調査・収集・分析— 有田洋子・金子一夫・長瀬達也・赤木里香子・竹内晋平・藤井康子 島根大学・茨城大学・秋田大学・岡山大学・奈良教育大学・大分大学	創造主義を支えるシステムの顕在化 ー構成教育への希求とその背景ー 小林貴史 東京造形大学
② 9:40-10:10	知識構成型ジグソー法を用いた美術鑑賞の授業デザイン ールドン作品の鑑賞実践からー 古田啓一 小田原短期大学名古屋サポートセンター	感性と形象の統合としての「芸術知」の方法論的解明ー木を描こう/ヒーローー孔雀明王/リベット工作の教材例からー 髙橋文子 東京未来大学	図工美術教育でプログラミング学習は可能かー身体性に着目してー 井上昌樹・郡司明子・茂木一司 育英短期大学・群馬大学・跡見学園女子大学	創造美育運動の虚像と実像—「創美論争」に関する研究成果をふまえて— 新井哲夫 群馬大学名誉教授	表現・制作活動に対する意識調査に関する一考察 - 保育士・幼稚園教諭・教員養成課程における「造形演習」の授業から ー 前沢知子 東京学芸大学大学院
③ 10:20-10:50	「芸術教養美術ゼミ」〔鑑賞教育入門〈絵を読もう！自由解釈〉〕における受講者の読解傾向 —ドメニコ・ギルランダイオ「羊飼いの礼拝（1485年）」の場合— 岡田匡史 信州大学教育学部	質問紙調査に基づく図画工作科の「造形遊び」における目標設定・評価のための語彙に関する研究 佐藤絵里子 東海大学スチューデントアチーブメントセンター	美術教育における「なって／みる」ことに関する一考察 ーアート的身体の活性化に向けてー 郡司明子 群馬大学	美術科教科書1956～2021年度本1学年「見て表す」題材における解説文の検討 山口喜雄 元宇都宮大学教育学部	トーランスの創造性テストの再考と試行Ⅲ—児童期（9～10歳児）における調査と分析— 犬童昭久・王寺直子・栗山裕至・櫻井晋伍・白石恵里・丁子かおる・樋口和美・前村晃・宮崎祐治 九州ルーテル学院大学・認定こども園あかさかルンビニー園・佐賀大学・福岡県立大学・大分県立芸術文化短期大学・和歌山大学・福岡女子短期大学・佐賀大学名誉教授・神野こども園
10:50-11:10	休憩（20分）				
④ 11:10-11:40	視覚障害のためのインクルーシブアート教育：理念と教材開発 茂木一司 跡見学園女子大学	題材の意義を工夫した指導と評価の一体化 ～自画像制作での振り返り記録から主体的に学習に取り組む態度の評価を考察する～ 古川拓明 町田市立小山中学校	芸術教育を核としたSTEAM型学習のカリキュラム開発の試案 藤井康子・西口宏泰・麻生良太 大分大学教育学部・大分大学研究マネジメント機構・大分大学教育学部	沢野井信夫の「あそび」を活かした美術教育の構想 ーその構想の背景について ー 宇田秀士 奈良教育大学	米国幼児教育（学）者C・トッパルにみる1990年代レッジョ・エミーリア・アプローチ受容 ー幼児は「木の端材」の活動から「組み立てること（アッサンブラージュ）」へ挑戦するー 鈴木幹雄 関西福祉大学
⑤ 11:50-12:20	特別支援学校等卒業後の障害のある人・サポートする人のアート活動に関する実態調査 池田吏志 広島大学	小学校スタートカリキュラムの題材開発と見取りの在り方の一考察 藤谷貴代 北海道北斗市立大野小学校	アートを主軸とした STEAM 教育 -『モナ・リザの教科書』からの考察- 渡邊晃一 福島大学	関東州と満鉄沿線付属地における公学校「作業科」の導入過程 —『満鉄教育たより』掲載記事を手がかりとして— 齊藤暁子 名古屋大学大学院教育発達科学研究科	レッジョ・エミリア保育実践の創造性教育と日本への導入における問題点と課題（第一報） —芸術性の理解・アトリエリスタの養成・プロジェクト学習を中心にして— 髙橋 敏之・髙橋慧・小田久美子 岡山大学・くらしき作陽大学・ノートルダム清心女子大学
12:20-13:10	昼休憩（40分）				
⑥ 13:10-13:40	対話型鑑賞ツアーによる参加者のパフォーマンス転回の可能性 ー瀬戸内国際芸術祭を事例としてー 山本暁美 東京大学大学院 学際情報学府	水彩絵の具の指導に関するアンケート調査からの一考察—「濁る」「汚い色」に関する教員の自由記述から— 佐々木百花 上越教育学大学院学校教育研究科	アニメーションにおける動きの表現探究ツールの開発 布山タルト 東京藝術大学	戦前の地方美術教育史に関する研究（1）ー自由画掲載における地方紙『秋田魁新報』と選者「伊藤弥太」の視点ー 長瀬達也 秋田大学大学院教育学研究科	絵本の読み聞かせによる社会情動的スキル育成の可能性についての一考察 橋本忠和 北海道教育大学函館校
⑦ 13:50-14:20	対面とオンラインを組み合わせた美術館教育プログラムの実践 ～山口県立美術館と山口情報芸術センターの連携～ 平野智紀・原 泉・岡本麻美 内田洋行教育総合研究所・山口情報芸術センター・山口県立美術館	図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究・Ⅲ：教師の発話分析を通した授業研究プログラムの構想 大泉義一・永縄啓太 早稲田大学・横浜市立南太田小学校	美術による異文化間の対話:日米間における児童の美術交流 リョウ クリスティーン University of North Carolina Wilmington	戦後美術教育史の構想—敗戦と明治維新の類同性を踏まえて— 金子一夫 茨城大学名誉教授	造形活動における子どもの気付きに関する事例研究-幼稚園での造形活動における子どもの相互作用への質的アプローチ- 大西洋史 関西国際大学
⑧ 14:30-15:00	開かれた美術館の共同生成的アクションリサーチに関する研究 茂木和佳子・松本健義 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科・上越教育大学	高等学校工芸科目における用具の扱いに関する指導内容の特徴—学習指導要領及び教科書調査を通してー 髙野雄生 東京都立拝島高等学校	日中両国の小学生の写実表現に及ぼす影響要因ー教科書とアンケート調査を通して BAO Haiqing・Nagai Yukari 北陸先端科学技術大学院大学	近代日本図画手工教科書データベースの充実と活用に基づいた美術教育史研究の可能性と課題 赤木里香子・角田拓朗・金子一夫・山口健二 岡山大学 学術研究院 教育学域・神奈川県立歴史博物館・茨城大学教育学部	にじみ絵の実践における幼児の描画発達に関する一考察 吉田奈穂子 筑波大学芸術系
⑨ 15:10-15:40	予備	予備	予備	明治期における博物・理科に関する教育掛図の研究 牧野由理 埼玉県立大学	予備
15:50-	閉会式				

【第 44 回大会に関するお問合せ】
東京大会実行員会　事務局　Email:　44th.artedutokyo@gmail.com

【年会費・入会・その他会員資格等に関するお問合せ】
本部事務局支局（ガリレオ学会業務情報化センター）
Tel:03-5981-9824　／　Fax: 03-5981-9852
E-mail: g030aae-support@ml.gakkai.ne.jp

臨時理事会報告

本部事務局　新井馨（大阪教育大学）・佐藤賢司（大阪教育大学）

臨時理事会は，2021 年 11 月 7 日（日）17 時 00 分から，Zoom によるオンラインで開催された。臨時理事会終了は，19 時 20 分であった。出席した理事は 14 名であった。

【審議事項】

１．３学会連携・統合

３学会連携・統合について，造形芸術教育協議会 幹事校である本学会がこれまでの経緯について整理する必要がある旨，山木代表理事より説明がなされた。そして，本件を担当する新関理事よりこれまでの経緯について説明がなされ，宇田副代表理事より確認するべき事項の提案がなされた。その後，両者の意見を踏まえ議題について議論がなされ活発に意見が出された。以下意見を簡略化し箇条書きにて記す。

- ３学会統合については，目指す方向が見えてきたという段階であり，これまで積み重ねる形で合意形成を図ってきたと捉えている。
- 統合した際，学会の水準は保たれるのかなど不安要素が多い。統合ありきで進めるのではなく，慎重に考える必要がある。
- 何のための統合なのか，本学会としてどうしたいかはっきりと明確にするべきである。
- 連携・統合することの必然性・切実さが共有されていない。
- 本案の発端から時を経ていることを踏まえ，組織の弱体化，大学人員削減など現実に即した議論が必要である。
- ３学会の性質が異なっていることを考慮する必要がある。
- 理念や目標・思想的なところを掲げながら自己努力を行う態度が必要であり，ひいては美術教育界全体の話でもある。
- 早急に統合か否かを決定するのではなく，共同プロジェクト等を掲げつつ検討を重ねていくとおのずと答えが見えてくるのではないか。
- 答えを急がなくてもいいのでは。美術教育へのそれぞれのスタンスもあるが，アカデミックな研究のみならず，教育との関わりも重要である。
- 米の NAEA のようなアンブレラ型が望ましい。
- 美術教育への向き合い方も，学会運営や大学の状況ですら異なっている中，コンセンサスを図る時期だと考える。
- 統合によって求められる労力などコスト面から検討すると，コスト増になる可能性が高い。統合を考えるときには，コストがかからぬ方策を考ながら，検討すべきである。
- 今すぐではないが，統合は可能である。本学会が他の学会の理事・会員から見て，理想的な運営を行っていると見えるように努めることが，統合にとってプラスに働く。さしあたり，この方針を堅持すべきである。
- 若手や新しい人の意見も集約していく必要がある。
- 論文査読など若手を起用し，育成していく必要もあると考える。

第 11 回協議会に向けて以上の意見聴取がなされた。これらを踏まえ，今後の協議内容を事務局で整理していく旨が確認された。次回の造形芸術教育協議会の開催時期については，事務局が参加学会と協議して決定することとなった。

２．教科教育学コンソーシアムの委員選出方法

教科教育学コンソーシアムの委員選出方法について，山木代表理事より次の通り提案がなされ承認された。具体的な選出委員名とその仕事の内容についてなどの説明は，代表理事から理事全員にメールにて行われる予定であり，その内容を踏まえ，理事は理事・会員の中から適任者を推薦する。これについて事務局で多角的に検討し，本人承諾の後，決定する予定である。なお，一連の手続きの公平さを担保する。

以上

事業部主催 リサーチフォーラム・オンライン「オンラインレクチャーシリーズ」（第３回：3 月 13 日（日）開催）

「社会人（社会・人）のための美術教育？：美術教育の未来へ向けての疑問符」

北野諒（大阪成蹊短期大学）

１．開催にあたって

2021 年度のリサーチフォーラムでは，コロナ禍においても学術研究の灯を絶やさずに美術教育学の未来を展望することを企図し，事業部主催でのオンラインレクチャーを展開してきました。最終回となる第３回では「社会人（社会・人）のための美術教育？」をキーワードとして，地域や社会の多様な現場で実践を重ねている，2 名のゲストスピーカーと「美術教育の未来」へ向けた検討を試みます。

平野智紀氏（内田洋行教育総合研究所主任研究員，昭和女子大学環境デザイン学部非常勤講師，東京大学大学院学際情報学府博士課程在籍）は，本学会の学会員であり，あいちトリエンナーレ 2019 においてボランティア育成特別講師を務めるなど，芸術表現と社会との接点を美術教育の観点から研究・実践されています。また安斎勇樹氏（株式会社 MIMIGURI 代表取締役 Co-CEO，東京大学大学院情報学環特任助教）は，ワークショップデザインの方法論を商品開発・人材育成・地域活性化のコンサルテーションに援用するなど，企業・地域において求められる創造性について，学術的かつ実際的に知見を蓄積されておられます。

美術教育によって涵養される資質・能力は，社会の中で生きていくうえで，どのように活かされうるのか？ あるいは，社会で求められる創造性から逆算するならば，美術教育はどのようにその萌芽を育むことができるのか？――本フォーラムのタイトルに差し挟まれた疑問符（？）は，これらの問いや，「社会人」という言葉に潜在する社会像・キャリア観への問い直し，美術教育の担うミッションの問い返しなど，複数の問題群を含意しています。

マルセル・デュシャンは「答えはない，なぜなら問題が存在しないからだ」という言葉を残しています。これを裏返すならば，未来に向けて美術教育学が「答え」を出すためには，まずはそこに「問題」が発見されなくてはなりません。全３回のレクチャーシリーズの結びとして，美術教育における新たな「問題」を生み出すことができれば幸いです。

＊第３回フォーラム開催にあたって，企画者による問題提起の動画を作成しました。

URL・QR よりご覧いただけます。 https://www.youtube.com/watch?v=BtinjQa2kA8

２．日時： 2022 年 3 月 13 日（日）13:00～15:00 （リアルタイム配信）

＊フォーラム当日までに，参加お申込みいただいた方を対象に，ゲストスピーカーによる関連動画（オンデマンド視聴可能）を配信いたします。

３．参加費用： 無料

４．開催形態： 動画配信プラットフォームを用いたオンライン開催

５．申込方法： URL・QR からアクセスし，グーグルフォームにてお申込みください。

https://forms.gle/RgAKpxBCUvvujCvD6

６．問合せ先： 事務担当・吉原和音（大阪府立江之子島文化芸術創造センター　アートコーディネーター）

artedu2021.rf@gmail.com

７．協力： 内田洋行教育総合研究所

花篤實先生を悼む

理事　金子一夫（茨城大学名誉教授）

１．追悼の言葉を述べるにあたって

花篤實先生が令和３年 11 月 7 日に逝去された。花篤先生は鈴木寛男，大勝恵一郎先生のあとを受けて宮脇理先生とともに美術科教育学会を牽引されてきた。それだけにずっとお元気でいてほしかった。日頃から先生の謦咳に接していたわけではなく，茨城在住でかつ美術教育史研究をしている私に追悼の言葉が依頼されたのは，客観的に花篤先生の歴史的功績にも触れよということであろう。花篤先生の最大の功績は，大阪教育大学に理論中心の美術教育学専攻大学院をつくり，個性的な教官たちを取り込んで多くの美術教育学研究者を育成したことであろう。また幼児の美術教育の発展に貢献されたことも挙げられる。そして随所にさりげなく書かれた美術教育の歴史や現状への洞察は，今後評価注目されていくであろう。大阪という地域性が深く関わっていると思われる，花篤先生の人徳の一端を考えることで追悼したい。

２．花篤先生との出会い

個人的なことを述べると，花篤先生に初めてお会いしたのは昭和 50 年頃，私が東京芸術大学美術教育学研究室の研究生か助手の頃であった。主任教授の桑原實先生から大阪のケイトク先生が来られるので君がお相手しなさいと言われた。大阪教育大学で美術教育大学院が出発するので東京芸術大学大学院を調査に来られたのだと思う。しかし，東京芸術大学では美学の山本正男先生が芸術教育論を講義されていたが，美術教育研究室には研究の蓄積は無く，お役に立つ情報も無かったと思う。私も松原三五郎や白浜徴について話した記憶だけある。

その後，本学会の前身大学美術教科教育研究会等の様々な場でお会いすることになった。そして後述の座談会出席を含め，私を若い時から様々な場面で引き立てていただいた。学会懇親会の二次会には大阪教育大学と関係ない私を毎回誘ってくれた。花篤先生をはじめ大阪の人たちは，他人を知己のように受け入れて祝祭的空間を作るのが好きである。二次会はいつも大盛り上がりであった。他の地では一般に研究者は，美学・美術史や教育学の分野でもそうであるが，大学，研究室，指導教員等を背負って閉鎖的・排他的になりがちである。

３．花篤先生の幼少年時代

花篤先生は昭和７年５月 18 日に大阪府貝塚市に米穀商の三男として生まれた。家業は統制経済の下で配給所にさせられ，長兄は戦死したという。そんな幼少年時代の美術教育に関係する思い出を書いている。幼稚園でタヌキの腹をうまく塗り狭めていけなくて泣き出しそうになっているところ，そっと手を握って一緒に描いてくれた先生の手の温もりが絵を好きにさせてくれ，また自分の指導論の根底につながっているという [1)]。また国民学校４年のときにコンクール出品作を学級で選ぶことになった。花篤先生は学級で戦争画の第一人者で，特に軍艦の絵が得意であった。当然その軍艦の絵がコンクール出品作として同級生から推薦された。ところが，女子師範を出たばかりの担任の先生は，転校してきた児童の野菜の静物画を取りあげ，こちらの方がよいという説明を始めた。学級は納得せず騒然となり，結局両方を出すことになった。花篤先生も納得はしないながらも，自分の知らない世界があるらしいことを思ったという [2)]。終生，花篤先生がテーマとした，美術教育における「実感性と普遍性」という問題の原点である。

そして旧制中学（岸和田中学か）1 年のときに敗戦となった。たいていは，教師がそれまでと正反対のことを言い始めたので，怒りと不信感をもったとなる。ところが，花篤先生は「不信感というより，世の中なんていうのはこんなものなのかという思いが強かった」という [3)]。理念への過剰な傾倒が少年のときから無い。

４．大阪学芸大学卒業と美術教育実践

昭和 26 年 4 月に大阪学芸大学中高課程に入学する。同大学は前身の師範学校の関係で天王寺，池田，平野の三校に分かれていた。先生は自宅に近い平野校を選んだ。最初は体育を専攻するつもりであったが，英語の点がよかったので英語科の先生に誘われて行ってみたら英語学中心で面白くなかった。そんな時に美術の河井達海教官に声をかけられて夏休みの頃に中高美術に転じた。その学年の中高美術は花篤先生一人であったという。当時は

２年まで平野校で学び，３年から天王寺校で学ぶことになっていた。天王寺校には大阪の美術教育界の中心であった高妻巳子雄教官がいた。高妻は当時学内より学外での啓蒙活動に熱心で，学外で主宰する研究会には西日本各地から教員が参加していた。花篤先生も連れられていき現場での実践を見聞することができた。河井と高妻は口も聞かないほどの関係であったが，花篤先生は卒業後も二人から良くしてもらったという。

卒業後は大阪の阿倍野中学校に３年勤務してから，大阪学芸大学附属平野小学校図工専科教諭となった。専科教諭は学級担任教諭より低く見られるので誰もやりたがらなかった。そこで図画科専門の専科教員を置くことになり，中学校免許なので小学校担任ができない花篤先生に白羽の矢が立った。附属小勤務で小学生，さらに幼稚園の美術の面白さに気づいた。附属時代に実践した一つに，東京発デザインを皮肉った「大阪のデザイン」，例えば，子どもの好きな食べ物をコラージュにした「うまいものシリーズ」があった[4]。それは，後年述べた「明治以来西洋の美術教育の移入の窓口であり，啓蒙の中心であった東京の活動に対して，大阪，大阪の児童美術では，一貫した土着の伝統的な意識に支えられた美術教育の実践があったという意識です。」[5]の一例であろう。

５．大阪学芸大学への採用，大阪教育大学大学院美術教育専攻設置

河井，高妻の両方に学んだためか，昭和 39 年に絵画講座の助手として大学に呼び戻された。ちょうど実施された学科目制中の「美術科教育」の定員らしい。しかし美術講座では「美術科教育」には関心がなく，花篤先生も絵画制作に専念した。昭和 43 年に教科教育専攻大学院を大阪教育大学に設置する際も美術教官たちは，設置に否定的であった。困った大学は，昭和 49 年 9 月から花篤先生をアメリカの大学院調査に在外研究員としてペンシルベニア大学に派遣する。帰国後も美術教官は依然として関心がなく，花篤先生が美術教育理論を中心した大学院を構想し，昭和 50 年に他教科より 7 年ほど遅れて発足する。昭和 45 年同大採用の那賀貞彦先生，さらに昭和 47 年転任の熊田真幸先生と大学院指導体制を組む。那賀先生はラジカルな現代美術理論家，熊田先生はマルクス主義美学の徒であり，修論・卒業研究の審査や発表会で数時間に及ぶ大激論を展開したことがあったという。花篤先生は二人の先生を自由に活躍させつつ，組織全体で学生・院生を支援育成して教育成果を挙げた。

花篤先生は大阪教育大学卒業生でつくるモノ派系美術教育グループ「Do の会」も応援されていた。『教育美術』昭和 53 年 10 月号「行為の美術教育」特集は同会の活動を報告で，花篤先生も応援する解説を書いた。また『教育美術』昭和 54 年 4 月号の「アカデミズムの確立」特集は，花篤先生が司会をした若手研究者 4 名の座談会記録である。私も同会に出席したものの，初めて聞く那賀先生の早口で高度な話にびっくりして，何も言えなかった。選んでくれた花篤先生には申し訳なかった。数ヶ月後の大学美術教科教育研究会で那賀先生の発表を聞き，やっとわかったと那賀先生に私が言ったら，隣にいた花篤先生は笑いながら「私にはよくわからん」と言われた。

当時，全国的な教科教育専攻大学院設置政策を知った各地の大学ではその準備として，学科目「美術科教育」に実質的な美術教育学専門家を採用し始めた。ただ，教員の養成供給体制が整わず，他専門の若手研究者に赴任を頼むことも多かった。そのようなとき，花篤，那賀，熊田教官に鍛えられた理論派の大阪教育大学大学院修了生は，各地の大学に美術教育学専門教員として採用されていった。本学会でも大阪教育大学大学院生や修了生が活躍するようになった。花篤先生は学会に彼らを育ててもらったと言うが，学会も助けてもらった。

その後も本学会で代表理事など大きな役割を果たされた。学会での花篤先生は，やはりどんな会員でも受け入れて，その人の話を聞くという姿勢で一貫していた。

６．日本の美術教育への洞察

花篤先生が美術教育の歴史や現状に見ていたものは，先述の「実感性と普遍性」「(海外思想の）波打ち際と内陸」そして内陸での「磨きの構造」という問題であった。単純化して言えば，中央とか東京という「波打ち際」から外来思想が紹介される。しかしそれは，大阪に象徴される「内陸」で独得の消化過程を経る。その代表が「磨きの構造」で，方法が自己目的化して細部まで精緻な体系になり，教育目的が不明になっていく事態である。ただ内陸の人々の受容様式は否定すればよいのでなく，その消化過程や様式を明らかにしていくことが大事だと述べている。受容の一つである創造美育運動の盛り上がりに，戦争教育に加担した教師たちの贖罪意識が働いていたという指摘を何回かしている。ただ，そこに非難めいた響きはなく「しかたないよね」と寂しく受け止める感じである。前述の国民学校での担任への気持ちも似たようなものであったと思われる。

註

1）花篤實「美術教育における文化の一視点―試論」花篤實監修『美術教育の課題と展望』建帛社，2000，p. 234.
2）同上。及び花篤實「『軍艦の絵』」『教育美術』第 73 巻第 6 号，2012，p. 8.
3）「花篤先生退官記念座談会」『美術科研究』，第 16 号，大阪教育大学・美術科・教養学科（芸術学コース）1999，p. 3.
4）花篤實「大阪のデザイン」『教育美術』第 24 巻 9 号，1963，pp. 9-12.
5）花篤實「アメリカの美術教育―『道』としての日本美術教育」『大阪児童美術ニュース』第 1 号，1970，p. 6.

附記　今回，奈良教育大学の宇田秀士先生の談話と島根大学の有田洋子先生の取材メモを参照させていただいた。

書評

小松佳代子編著・勁草書房・2018 年 2 月（初版）・ISBN 9784326251254

美術教育の可能性：作品制作と芸術的省察

山木朝彦（鳴門教育大学）

今回，取り上げる『美術教育の可能性―作品制作と芸術的省察』は，ここ５年以内に出版された美術教育関係の書籍の中で，最もアカデミックな著作物であると言っても過言ではない。この本の編著者である小松佳代子氏（長岡造形大学教授）は，専攻した教育哲学を基本に据え，従来の美学・芸術学，芸術に関わる心理学など，人文・社会系分野の最新の研究成果をふんだんに利用し，美術教育がそのベースに置くべき，理論の素地を丁寧に編み上げている。その論述は，徹頭徹尾，理論書の作法に基づいている。

ここでは，小松氏（以下敬称略）が担当した第１部「美術教育の理論的位相」を中心に，その第１章については内容を解題するかたちで，２章・３章については，特に興味を覚えた箇所を取り上げてこの本の紹介に努めたい。

第１章「美術教育の位置づけ」について

冒頭，エリオット・アイスナーによる美術教育思潮の分類であるコンテクスチャリズム（文脈主義）とエッセンシャリズム（本質主義）を置く。前者に近い英国の教育学者であるＪ・ホワイトに対する批判を行ったＣ・クープマンの論点を紹介している。さらに，Ｒ・Ａ・スミスがホワイトとは異なる思想の系譜整理を行った上で，後者に位置する考えを展開したことも紹介している。

これに続き，児童の人格的成長を美術教育の目的とするＶ・ローウェンフェルドから，芸術の認識的側面の探究に呼応した美術教育の現代化までを俯瞰する。私達にとって馴染みのあるＳ・Ｋ・ランガー，そして，米国の芸術理論に関する理論的探究に関わった者であれば，一度は紐解いたことがあるかもしれないＮ・グッドマンの著作などを要領よく紹介した後，これらを理論背景として『美的教育雑誌』（Journal of Aesthetic Education）が出版され，CEMREL やケタリング・プロジェクトなどのカリキュラム立案が登場したことを記している。

要約から外れるが，この『美的教育雑誌』が米国の芸術教育界の理論研究に果たしている役割はきわめて大きいと私は思う。1966 年にイリノイ大学出版から創刊されたこの学術誌は，その購読者として，美術教育者だけでなく，哲学者，芸術評論家，美術史家を想定しており，これに呼応して，執筆陣には人文・社会系の学問の先導的変革者達が集っている。

人文・社会科学の学問という学問が極度に蛸壺化してしまっている日本では，なかなか内容を掴み難い種類の専門誌である。大雑把に言えば，1989 年から 2000 年まで続いた「アートエデュケーション」誌（建帛社）と，美学会の論集「美学」，理想社発行の「理想」，青土社発行の「現代思想」，教育思想史学会の論集「近代教育フォーラム」等の各誌から選抜された論攷が掲載された印象を与えるが，芸術教育に収斂されるテーマを掲げている点は，喩え話として出した，まとまりのないディシプリンの混成論文というイメージとは大いに異なっている。

NAEA 発行の Studies in art education（1959 年～現在）や Art education : Journal of the National Art Education Association（1948 年～現在）とともに，この『美的教育雑誌』が，その時々の美術教育思潮を形成する力の源となっているところに，米国美術教育界の理論的バックボーンの確かさを窺い知ることができる。

これら最新の知の地平に拓かれた米国の美術教育現代化の流れを説明した後，小松は日本の美学者（芸術学研究者を含む）達が 1950 年代半ば以降に追究した美術教育思想の動向を明確化しようと努めている。

日本美術教育学会の創設者である井島 勉が彼の同時代の美術教育運動を批評した視点を紹介しつつ，その思想の性格を「井島の議論はカントの言う「美的無関心性」の近代美学の下にある」と断じたうえで，「美術は制作者の主観性が普遍性へと通じるところにその特殊性があり，美術教育の意味もそこにある」（14 頁）と井島の思想の基本ラインを自らも継承する姿勢を見せている。

次に，美的教育の内側に美学的な根拠を据えようと努めた碩学，山本正男の思想が目指した理想が，美術を扱う教育技術としての美術教育論ではなく，普遍的人間形成論の中核を担う哲学としての美的教育学であったと論じる。山本の人間形成論としての美的教育学は，自己との対話，他の人間との対話，世界との出会いという三種の次元における出会い・対話・発見を重視した点で，佐藤 学の学びの共同体論と呼応する論理構成となっていたと論者は指摘する。

ただし，最終的な山本の思想が位置する座標の特定となると，その思想的な営みがある種の限界を有していた点を指摘し，次のような評価を与える。「[山本の思想は] 今見たようにH・トリュンパーのミューズ教育に最も親近感をもっているように読めるが，しかしさまざまな理論を含み込むことができるような「総合的な美術教育学」を志向するあまりその議論は拡散してしまったようにも思われる」。(18 頁)

これも要約の流れから逸脱するが，山本正男といえば，学長を務めた東京藝大や沖縄県芸を思い起こすか，彼が卒業した東京帝国大学文学部美学美術史学科に思いを馳せるひとばかりだろうが，私の母校である横浜国立大学に約 15 年間勤めていた。そうした関わりからか，学部１年生の時に特別講義を聴講した記憶がある。彼の著書『美の思索』をもとに，崇高という価値やE・スーリオの芸術論について教わった記憶がある。

次に登場するのは私たち美術科教育学会員のなかにも，その人となりを記憶しているひともいるはずの石川 毅の思想である。石川は，教科教育という実践学以上に，美術教育の学問的基礎付け，それもとりわけ美学による基礎付けを希求するとともに，研究者が社会の問題に意識的にコミットメントする「参与」＝「与り」のあり方を求めた。それは，美学と美術教育と美術制作をつなげる可能性を秘めた探究のベクトルであった。

次に小松は教育学における陶冶をめぐる今井康雄やK・モレンハウアーの言説を紹介した後，ドイツの教育哲学者，C・ヴルフのミメーシス論に焦点を絞り詳しく論じている。というのも，陶冶の過程はミメーシス的だからである。模倣に引きつけて考える従来のミメーシス論とは異なり，ヴルフのミメーシス論は「シミュレーション」「表象」「表現」を意味している。このようなミメーシス論によって，想像界に繰り込まれる世界の写像を受け入れる視覚的な経験が，文化形成に寄与していることをヴルフは導き出すのである。

さらに英米系の分析的教育哲学が芸術と教育の関係性をテーマに発展してきた学術史について，R・W・ヘップバーン，N・キャロル，C・Z・エルギン等の論を紹介しつつ，次のようにまとめている。

「(前略) 情動や感情を認識や思考と結びつけ，芸術をシンボル論的に捉えることでそれが教育可能であるという議論がなされているのである。」(31 頁)

第１章おわりは，ネオ・プラグマティズムに位置づけられているR・シュスターマンと日常言語派の哲学に依拠するP・スタンディッシュの考えを紹介・吟味し，いわば，彼らの知の座標を特定する。

例えば，シュスターマンはグッドマンによるシンボルと美的モードという考えを芸術の定義たり得ないと批判し，ポピュラーアートがグッドマンの定義からこぼれ落ちてしまうことを例証とした。総じて，現代の教育哲学における芸術概念の問い直しは，美的なものと公共性の理論との接近，およびJ・デューイの美的経験論への傾斜へとつながる動向として描写することができる。

しかし，小松はシンボルの生成論が一般的コミュニケーション論に回収されることに強い疑義を抱き，シンボル生成過程である美的経験の自己形成的なアスペクトに着目すべきだと主張する。

また，目と手の訓練の歴史と決別できない美術教育や創美的自己表現論に固執する現在の美術教育は，早晩，潰え去る運命にあると予測する。これを回避するには，世界の意味の問い直しを現代美術が促していること，そして，鑑賞者の認証をあらかじめ拒み否認する制作者の存在を露わにしたアートの様態を認識し，これと積極的に関わり続けることが何よりも重要である。

第２章「美術の学びの特殊性」について

第１章の要約について大幅に紙幅を費やしたので，第２章・３章については，個人的に興味を覚えた箇所を抽出し，まとめておきたい。先立つ章では，1950 年代から現在まで，とりわけ 70 年代以降の美学・教育哲学を紐解き論じていたが，この章では 18 世紀イタリアの人文主義思想家であるG・ヴィーコの思想に著者は着目する。その思想を究めると，次のような知の捉え方が可能となる。すなわち，美術に関わる知は，意識レベルで一義的な真理を求める観念としての知ではなく，身体的な次元と結びつき，感覚・身体的レベルで働く知である。それは意識で「考える」知と言うよりも，身体で理解する自分は「できる」という知のあり方なのである。

ヴィーコの哲学はメタファについての思索とも言えるが，『形象の力』（白水社）を執筆したE・グラッシなどを援用し，このメタファ論から次の考えを抽出している。

芸術のメタファ性について芸術家が抱く形象を物質に移転させるエレメントと素材を形象へと還元し，芸術家の内的世界に投企するエレメントであること，ゆえに，芸術家はマテリアルを抜きにした自らの観念の完成はで

きない。小松の言葉を引用するならば,「モノとのやりとりの過程においてこそ，芸術家の内部にある形象も見いだされていく，その働きそれ自体がメタファなのである」。(44 頁)

そして，イメージとイマジネーション，ミメーシスとイマジネーションの関係性について，知覚とイメージの関係性や審美的経験に関する考察を含み込みながら，考察を進める。知覚とイメージの関係性について言及した箇所では，フロー体験なる言葉を広めたＭ・チクセントミハイの考えやＦ・ヤノウィンの VTS を参照しており，現代社会への浸透力を獲得した最新の考えや運動にも目配りを欠かさない著者の現代性が伺える。さらに，道具論を媒介にして，社会システムや自己というシステムという理論構成に回収し尽くされぬ自己について考察している。

詳細は省くが，小松がここで論考の地平形成に役立てているのは，Ｂ・ラトゥールのアクターネットワーク理論（ANT 理論）の思想圏に近いところで世界を読み取るＬ・マラフォウリスと，ANT 理論を批判しメッシュワーク理論（SPIDER 理論）を展開している社会人類学のＴ・インゴルドの考え方である。それらの議論は，従来の社会学的世界観を覆す可能性を秘めた認識の地平にある。著者は前者を俎上に上げた後に，後者の理論的優越性を語ったのち，環境に働きかけ，環境に影響されるなかで，人間形成を遂げる制作者像を描写する。最新の社会科学的思想領域を表現論にパラフレーズする小松の試み（67～70 頁）は注目に値する。

第３章「芸術的省察と美術教育」

第３章の中心は，Arts-Based Research（ABR）とアートグラフィ（a/r/tography）についての考察である。これらの内容と実践については，2019 年に出版された，笠原広一とリタ・Ｌ・アーウィン編の『アートグラフィ―芸術家/研究者/教育者として生きる探究の技法』(学術研究出版）に詳述されているが，美学と教育哲学の文脈の中での ABR 及び a/r/tography の位置づけについては，本書の 75 頁から 108 頁にかけての論述が有益となる。

ABR という考え方を提案し押し広げた著書は，Ｔ・バロンとアイスナーの共著なのだから，アイスナーの思想の核にある「質的知性」を ABR に関係づけることは，定石の一種ともいえるわけだが，アイスナーの思想を深く読み込んだ筆致ゆえに，説得力をもった論述となったのであり，この点は高く評価されるべきであろう。

この章の終わりは,『無知な教師』や『解放された観客』などを著したＪ・ランシエールのデモクラシー論を取り上げている。この思想家にとっての「解放」は，伝達の次元において方法論的に熟考されたキーワードである。分かり易く言えば，芸術家の意図をそのまま伝えるという考えは「愚鈍化の論理」なのであり，一種の「誤配」こそが「解放」の可能性を秘めた「解放の論理」だとする。

ランシエールのこうした考えに照らして，創造美育運動の実践を解釈し直す余地があることを小松は指摘している。そして，最も端的に著者の考えを表しているのが,『美術教育の可能性』第３章末にある次の言葉である。

「美術は探究や思考の営みであり，芸術的省察によって質的知性を涵養するという教育的意義をもつ営みである。それゆえ制作者が論文を書き理論的思考を深めることは，制作と別のことではない。」(122 頁)

第２部の構成およびこの本からの学び

第２部「制作者による芸術的省察」の部分もまた重厚な論考が続くのだが，紙幅の制約もあるので，題目と執筆者名のみを次に記しておく。「リアリズム絵画における知性と思考」(橋本大輔),「「まれびと」的視点と芸術的省察」(三好風太),「「贈与」としての美術・ＡＢＲ」(櫻井あすみ),「芸術における「隔たりの思考」」(菊池 匠),「もののなかで夢をみる」(斎藤功美),「制作活動における美術の探究の流れと，探究型学習」(栗田絵莉子)。いずれも魅力的な論考である。

さて，本書の第１部に集約されている小松佳代子の研究から，私達は何を学ぶべきだろうか。

最初に言うべきは次の事だろう。ここで扱われているような現代思想および現代アート理論の動向について無知なままで何かを著すことは，美術教育研究者にとって不名誉なことである。より発展的に言い換えるならば，これらの理論を美術教育研究に取り入れる努力は，美術教育研究に携わる全ての研究者に求められている。

幸い，美術科教育学会の多くの者が参照したはずのＥ・アイスナーの『美術教育と子どもの知的発達』(黎明書房）やＡ・Ｄ・エフランドの『美術と知能と感性―認知論から美術教育への提言』(日本文教出版）等の著書，石川 毅（故人），岡崎昭夫（故人），長谷川哲也，長田謙一，柴田和豊，藤江 充，直江俊雄，中村和世，和田 学，笠原広一らの論文は，小松の思想圏の水準に導いてくれる恰好の文献である。また，本学会の企画により出版された『美術教育学叢書１ 美術教育学の現在から』も，小松が渉猟した 20 世紀後半の理論的パラダイムを俯瞰するために役立つであろう。

国の施策として，教職大学院へのシフトが明確になった現在だからこそ,〈実践家・理論家〉という安易な二分法を越えた美術教育学の構築が急務なのであり，そのような時期ゆえに，本書に見られる理論探究の作法を全ての美術教育研究者が学ぶべきだと言えよう。

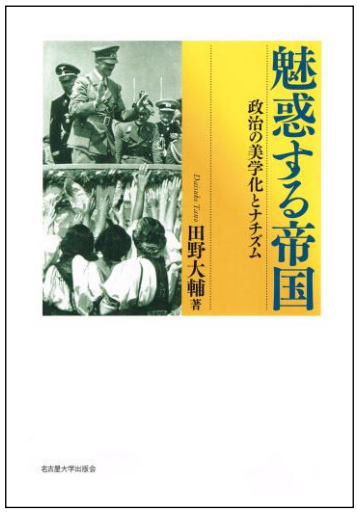
書評

田野大輔著・名古屋大学出版会

魅惑する帝国―政治の美学化とナチズム―

柳沼宏寿（新潟大学）

1.　戦争と教育



昨年末の朝日新聞に「日本人が，戦争を選ばないために」という記事が掲載されていた。東大の加藤陽子教授が, 14 年ほど前に神奈川県鎌倉市の私立栄光学園の中高生 17 人を対象として，日本近現代史における「戦争の論理」についての授業を行ったが，（これは書籍「それでも，日本人は『戦争』を選んだ」にもなっている）それを受けて，当時，授業に参加した生徒らが現在 30 歳前後になってインタビューに応じたものである。(朝日新聞, 2021. 12 付朝刊) そのうちの一人が「戦時中なら，自分も『神風が吹く』と言いふらす側だったかもと思うんです」と答えていた。この言葉は論者自身にも突き刺さった。「もし，自分が戦時中に教壇に立っていたら」と常々自問していたことと重なったからである。しかも，周知の通り加藤教授は日本学術会議の会員候補任命拒否問題で拒否された一人である。これは，もはや「もし」ではなく，まさに自分も当事者としての態度が問われている問題なのだ。

さて，私たちが二度と同じ過ちを犯さないためにはどうすればよいのか。そのような問いを意識しながら一冊の本を選択した。今回紹介する田野大輔著『魅惑する帝国―政治の美学化とナチズム―』は，究極の独裁国家を構築したナチスにおける「政治の美学化」に迫ったものである。この本は歴史社会学の研究書であり，専門外の論者が書評などとはおこがましい限りだが，ファシズムというイデオロギーの形成に「美」がどのように関わっていたかの問題は美術教育と決して無縁ではない。特に，平和ボケが叫ばれつつ，「場の空気」や「忖度」など同調圧力の問題も顕在化してきた時代だからこそ一考の価値があると考えた。

２．本書の射程

本書は，タイトルからお察しの通り，ベンヤミンが『複製技術時代の芸術作品』でファシズムを「政治の美学化」と呼んだことを受けて，その意味を独自の視点から解明しようとするものである。独自とはいえ，先行研究の推移を踏まえた論理展開は説得力があり，思い込みから解き放たれるような感覚を抱いた。これまで，ベンヤミンの「政治の美学化」は全体主義的なプロパガンダの問題として，体制側について論じられることが多かったが，著者の射程は，大きな歴史観からは見えにくかった大衆の側へ向けられている。具体的には，第三帝国（ナチス支配体制下の国家）が「芸術作品」と位置づけられていたとし，その構造を政治と芸術の関係を超えて消費社会，大衆文化，労働者，その他諸領域と関連づけながら開示したものとなっている。ファシズムの政治における「美学化」を単なるプロパガンダと捉えるのであれば，大衆を扇動するために芸術は「美しい仮象」として機能するに過ぎない。しかし著者は，ヒトラーが建築や絵画を愛した芸術家として国家そのものを芸術作品にしようとしていたこと，また，「民族共同体」というイデオロギーに古典と近代の「美」が錯綜していたこと，さらに，写真や映画，キッチュなど，いわゆる複製技術時代の新しいメディアが「アウラ」の位相を変化させていたことなど，総合的な視点からファシズムにおける「政治の美学化」の構造を浮かび上がらせようとしている。

本書において，ナチ指導層の内部抗争や一般大衆の声を掘り起こしながらの考察は，現在の社会にも重なる部分が多く，リアルに伝わってくると同時に，ファシズムというイデオロギーの主体が大衆の側に差し向けられるにつれ戦慄すら込み上げてくるものであった。つまり，一部の権力者の思想というよりは一般大衆の感性の問題であることがわかってきて，それは美術教育に関わる立場としても看過できない問題である事に気付かされるのである。以下，本書の概要を章立てに沿って紹介する。

３．本書の概要

第一章は，ベンヤミンの「政治の美学化」に対する批判的検討を通して，第三帝国を「芸術作品」として捉える基本的な視点を提示している。「政治の美学化」という概念は，ファシズムにおける美と政治の結びつきを看破した洞察としてナチズム研究者らが注目してきた。その多くはプロパガンダとして，つまり全体主義的な大衆操作やイデオロギー統制の問題に還元されていたが，近年，民衆のナチズム体験に焦点を当てた研究からは疑問が呈されており，筆者はその潮流を踏まえつつ独自の解釈を提起する。ナチ体制内部の実情や大衆文化の実態を詳細になぞりながら，上からの大衆操作というよりも大衆自身の運動という側面を浮き彫りにし，第三帝国はヒトラーと大衆がともに築き上げた芸術作品と捉えるのである。

第二章は，ナチス・イデオロギーの中心的概念「民族共同体」について考察している。「民族共同体」としての民族統一という理念は，ドイツ人以外に対する排斥・攻撃を正当化し一般大衆にも受容されていた。しかし，近年の実証的研究から，ナチ政権内部で権力闘争が激化していたことや国民の内部にも批判や不満を表明する動きがあったことが明らかにされてきており，著者は，それを踏まえながら，「民族共同体」はナチズムの強制的な支配によっては実現に至らず，むしろ党大会が大衆娯楽を提供することで祝典化し，「民衆の祭典」として大衆のエネルギーを解放する場になったことに要因を捉える。「民族共同体」は「共同体を求める集合的な想像力が生み出したもの」で，その「想像の共同体」が体制をつなぎとめていたというのである。

第三章は，ナチズムの文化・芸術政策における近代性の位置づけについて考察している。ナチズムは一般的に「退廃芸術展」の内容などから反近代志向と捉えられているが，著者によれば，ヒトラーは印象派や未来派，キュービズム，ダダイズムなどの近代芸術が個人的かつ変化しやすい性格であることにおいて「真の永遠のドイツ芸術」とは相反するとみなしたのであって，モダニズムを全面的に否定していたのではなかったという。例えば，オリンピック大会時に作られた多くの彫像にギリシア美術の「古典的な美の理想」を備えた「新時代の新しい人間類型」を見出して評価すると同時に，世界水準の科学・技術の発展のために革新を目指していたことに近代的思考を捉えている。さらに，大衆的なレベルではナチ関連グッズが反乱したが，当初想定外であったこれらのキッチュも，即物的な芸術を大量生産し得たことで結果的にナチズムの近代化を強化することにつながった。筆者はこれをナチズムの「近代の古典美」を志向する運動と捉えている。

第四章では，「民族共同体」の担い手である「労働者」の問題を考察している。ヒトラーは，古典美を体現する男性の彫像を「労働者」のイメージと重ねて「新しい人間類型」と賛美する一方で，職場環境を合目的的に整備するなどの施策を進めた。そのように政治経済的な利害と美学的な関心を巧妙に結びつけて生産性を最大化させていたことを分析している。さらに，芸術が宣伝やスポーツ，人種衛生学，保健行政などとも結びついて「人間の品種改良」にまで携わりながら大衆消費社会・業績主義社会へと突入させていたとみる。

第五章では，ナチズムの支配を支えた「総統」のイメージを取り上げている。ヒトラーは，カリスマ・英雄的指導者として威厳を持ったイメージが想起されがちだが，一般大衆に映画や写真集で伝わっていたのは，むしろなごやかな表情や笑顔に満ちた親しみやすさであった。さらにナチ関連グッズなどのキッチュに対し，当初は党と国家への冒涜として取り締まりの対象とされていたが，次第に，ヒトラーへの素朴な共感にすぎないことや景気に与える影響などから許容されていった。筆者によれば，人々が求めていたのはカリスマ性より「総統の笑顔」であり，それを巧妙に演じたヒトラーは，「民族共同体」の幻想に情緒的基盤を与えたのだという。

終章では，「政治の美学化」の意味を分析しつつ，ベンヤミンの意図の実現可能性について考察している。ベンヤミンは『複製技術時代の芸術作品』において，未来派詩人マリネッティの発言を取り上げながら，美を絶対化して戦争や政治へ適用しようとするロマン主義的な芸術観を批判した。著者はさらに考察を深め，ナチズムはロマン主義が持つ「感情的・審美的・唯美主義的」と「非現実的・虚弱・感傷的」という両義的な性格を自覚しながら，民族主義的な傾向を強化し「鋼鉄のロマン主義」を目指していたとみる。そして，そのような美的志向を持つファシズムに抵抗する可能性を，フォトモンタージュやキッチュなどの表現に包含される「イロニー」に見出す。「政治の美学化」において，「美的なものが現状肯定のイデオロギーと化していたが，これに取りこまれた人々がみずからを異化することによって，美的なものに破壊的な衝撃力を発揮させる」として，現状を笑い飛ばすような批判的イロニーを「美的抵抗」と位置づけ，「政治の美学化」の幻想を打ち破るための方策として提言するのである。

４．「政治の美学化」の構造

このように，著者はベンヤミンの「政治の美学化」というフレーズに対し，いくつかの視点から歴史に埋もれた小さな物語を繙き，その実相を浮かび上がらせている。ベンヤミンは，複製技術によって芸術作品の「アウラ」が消失したと述べると同時に，ファシズムはむしろ複製技術によって「アウラ」を量産し政治利用した欺瞞性を

暴き出したが，本書では，その「アウラ」が位相を変えて，複製された芸術に向き合う大衆の背後，あるいは自らモニュメントと化した大衆自身の中に立ち現れ，極めて人間的な感性を揺さぶっていたことを掘り起こしている。その次元で感知される「芸術」の役割は，精神の解放，心の癒し，慈愛の自覚，といったものであった。例えば，「民衆の祭典」においてカーニバルなどで民衆の欲望を爆発させ，支配体制への不満を解消させていた。そして，ヒトラーが党大会でロックスターばりに観衆を熱狂させていたのには，その英雄ぶりと映画や写真集で流布された人間味あふれる表情とのギャップが関係していた。また，「国民受信機」や「国民車」と言われるラジオや自動車などによる大衆消費の拡大には，新しい生活や利便性への憧れがあった。さらに，大衆にはびこっていた「芸術価値の低い商品や明白なキッチュ」が，体制側からは問題視されながらも宣伝効果によって許容され，精神栄養素的な特徴によって大衆を支える役割があった。このように，大衆の現場では様々な要因が複雑に絡み合いながらも，民族的な要素と近代的な機運が彼らの感性を惹きつけ，その反応が新たな体制の動向を形成していたことがわかる。つまり「政治の美学化」とは，プロパガンダという一方向的な力学にではなく，芸術作品としての第三帝国を権力者と大衆が共同制作するような双方向の交信に見出されるものなのだ。

５．「芸術の政治化」とは

『複製技術時代の芸術作品』の最後に「政治の美学化」の対抗策として言及されている「芸術の政治化」について，ベンヤミン自身はほとんど説明していないが，著者はこの標語そのものに狙いを読み取っている。特に，「美学」を「芸術」と置き換えていることに注目し，「ベンヤミンは大衆を幻惑するファシズムの美学に対し，彼らを覚醒させる芸術の批判的意義を強調した」と捉える。芸術の「批判的意義」を顕現化させた事例として，ベルリン・ダダの写真家ジョン・ハートフィールドがフォトモンタージュの技法を駆使してナチズムを痛烈に風刺した作品を挙げる。例えば『ヒトラー式敬礼の意味』という作品は，検閲済みのヒトラーの写真を切り抜いて他の写真と合成したもので，本来は敬礼のために上げた右手で背後の資本家から金を受け取っている姿になっている。現実の断片を引用しつつその現実を異化する表現である。筆者は，そのように「権力をキッチュ化し，政治をシニカルに捉える民衆の想像力」に含まれる「イロニーの精神」に可能性を見いだそうとする。そしてその批判性をさらに実効化させる方法として，ヴォルフガング・F・ハウクの「抵抗の美学」を挙げる。それは，ファシズムに対し「攻撃」するのではなく「編成し直す」もの，つまり，ファシズムからイデオロギー的要素を奪い取るためにファシズムとともにそれらを追求するのだという。相手の懐に入り込む作戦といえようか。極めて難しそうな戦略だが，理論的に考えると，それは政権のイデオロギーを民衆と政権が共に客観視（メタ認知）する構図に他ならない。そこに「徹底したイロニー」あるいは「闘争的なイロニー」が「ナチズムの呪縛を脱却するためのよりどころとなる」というのだ。

このような戦略を現代社会の政治や教育に蔓延る権威主義的状況に照射する時，少なくとも二項対立を超えた発想が求められるのではないだろうか。その出発点は，やはり「対立」ではなく「対話」であろう。冒頭で紹介した記事で，当時生徒だった一人は「『合理的』な判断をしたはずが，戦争を選んでしまった―授業でそう教わった」と振り返っていた。そして，そのことを踏まえながら，これからできることは何かという問いに，「何が『正しい』のか，判断を間違えることもあるとすれば，出来るのは多様な意見をつぶさないことでは」と答えていた。今後グローバル化が進む社会において極めて大切な気づきと評価したい。世の中に自分と異なる他者の存在がある。その違いこそが『正しい』選択をするための基盤とならなければならない。

さて，私たちはこの時代の当事者として，学術会議任命拒否問題の他にもあいちトリエンナーレ問題など，教育や芸術と政治の様々な問題に直面している。また，その視線を世の中の縮図とも言える「学校」に移してみれば，授業をはじめとした諸活動に「自分と異なる他者との対話」が営まれている。私たちは日々，その意味で実践の場に立っているといえよう。そう考えると，自他の表現について対話を通して相対化し価値づけていく実践，つまり美術教育がこれからの時代を担う子どもたちにとっていかに大切なものであるかがわかってくる。芸術の「批判的意義」を学ばせることによって「芸術の政治化」の基盤を形成していきたいものである。

最後に，著者の壮大で深淵な研究の本質にはとても迫り得ず，また，自分の関心事に引き寄せた無理な構成をお詫びしつつ括りたい。戦争責任は決して他人事ではなく私たち一般大衆にもある。そして子どもの感性を育む教育は益々重要になってきている。そのような原点を改めて気づかされ，そして明日の実践への気構えを新たにさせられた一冊である。

書評

編集　茂木一司（代表）・住中浩史・春原史寛・中平紀子＋N プロジェクト / 東信堂

新版増補　とがびアートプロジェクト　－中学生が学校を美術館に変えた

川路澄人（島根大学）

青い空に白く流れる雲とたくさんの風船らしきもの，中学校の校庭に集う生徒達の姿，真っ青な帯（旧版はレモンイエロー）が印象的な表紙に極太ゴシックフォントで縦に「とがびアートプロジェクト」の文字。最近の美術教育関係の出版物にはない印象的な装丁。本書はいわゆる学術系の書籍というものではない，なんだか楽しげなで不穏な雰囲気を最初から感じさせている書物。実は私自身この本を毎日読み進めるうちに,「今日はどの部分を読もう」,「どこから読んでも良い感じの本だな」「読むたびに何だこれ？」という気持ちになっていった。何故ならこの本は，執筆者各人の「とがび」の思い出集ではなく，中平千尋（享年 48 歳）という一人の人間＝中学校美術科教諭と時間を共有し，美術教育によって人生そのものを揺さぶられた人々の体験の記録であり、それは私自身の美術教育研究・実践者としての歩みとも一致するからである。

本の構成・内容は最初に実践をビジュアルに紹介する印象的なカラー頁と「とがび」の概要，プレとがびとしての美術館との連携，（中平自身の考察に基づいた）「とがび」の 4 つの発展段階の出来事の時系列での記述，参加アーティストや卒業生による体験の考察、美術教育研究者や関係者による対談，マンガ，寄せ書き，年表などなど，「とがび」にまつわる情報がいろいろな形でアーカイブ化され，それが読む人に様々な刺激を与えてくれる。

さて，タイトルにある「とがび」とは何かについては，「長野県千曲市の戸倉上山田中学校の教室や廊下，グラウンドなど敷地全域を展示会場とした美術展『戸倉上山田びじゅつ中学校』（通称：とがびアートプロジェクト）の略称」と説明され，「借り物アート期」「キッズ学芸員覚醒期」「とがび解体期」「脱アーティスト期」という前述の 4 つに分けたフェーズごとに中学生が主体的な学びを表現する重要なトピックスが述べられる。では、この本の主張（実践）の本質はどこにあるのだろうか？それは，（彼と関わった関係者みんなが語る）中平千尋という一中学校美術教師の存在へのリスペクトと，その思いに至る理由について（みんなが等閑視してきた）「中学生」「中学校」と「美術」「教育」「美術教育」とが織りなすドラマのリアルさであり，なぜ中学生がアート／教育によって、そこまで開放されたのかという私たちの驚きであろう。一言で言えばそれに尽きる。

「中学生が学校を美術館に変えた」との副題は，中学生が学芸員になって作品解説をしたり，夜間の中学校で美術展をしたり，オタクの部屋を作ったりと，一見やりたい放題な内容の紹介を示すように見える。しかしふと立ち止まり，「何故やりたい放題ではダメなのか？」「やりたいことができない，させないのは何故なのか？」という問いに向き合うと，すぐに学校教育という自由を奪う規範的なシステムに呪縛された私たちに対して，芸術／教育の根源的な問いがそういう私たちを揺り戻す。本書の中に通底するテーマとして「大人は中学生という生き物に対して過大に干渉し，彼らの本当の姿を理解していないのではないか，人生において重要な時期であるのにやりたいことを押し込めることしかしていないのではないか，美術科という教科の可能性さえ蔑ろにしていないだろうか」，という中平氏からの問いかけである。現在の学校システムで主体的な人間を育成できるのか？この本はアートを学校教育に自由の必要性を再考させる触媒にし，実際に実践を通して実現させた証拠を突きつける。そして，中平は「とがび」を進める中で，中学生が自分の元を離れていき，最終的にもはや中学生に「アーチストはいらない」という結論に至らせるところが最も面白い。「とがび」は当初は中平が中学校にアーチストを招きマッチングさせ，コラボレーションさせたが，結果として中学生自らが自由な自立したアーティストとして育ってしまったことが読み取れる。

おそらくこの本を少しでも開いた人は，「『とがび』ってすごい，でもこんなことって・・・」という思いにかられるのではないだろうか。つまり，私にとって今回の書評を書くにあたって初めて知った「とがび」は既に美術教育ではなく，生徒主体の総合的な学びの場となっていたのである。きっと美術という不自由ささえも脱ぎ捨てた学びになろうとしていたのであろう。実際にこうしたプロジェクトを生徒，他の教員，学校，地域を巻き込んで開催するには

相当のエネルギーと揺るぎない信念がないとできないことである。それからもう一つ大事なことは「とがび」は単なる一過性のイベントではないことだ。そのために作られた「中学生が美術を楽しく学び，理解する」ための「N スパイラル」という中学 3 年間（115 時間の授業時間）のカリキュラムを作りも興味深い。現代美術の思考を基に美術教育を構想し周到に計画された往還カリキュラムが基礎になっている。

本書の中には印象に残る言葉がたくさんあり，その一部を記しておく。

・「中学生もそうなのだが，人間にとって最も難しい課題は，「我慢」ではなく，「自由にやっていい」という課題であると考えている。「自由」ということが一番難しいテーマではないだろうか」

・「これはアートなのか？それとも違うものなのか……？それで良いのか？良くないのか……？」

・「とがびとは 究極の寛容」卒業生　（卒業生の言葉で表現すると「とがび」とは「原点」「一期一会」「理想の自己実現」「表現の自由」「許しの期間」であり，「トイレ」だったらしい。）

そして今回新版増補版が発行された。増補部分は編集代表の茂木氏がこの「とがび」に新たなる解釈を加えたいという考えで「セルフ・エデュケーションやインプロを通してアートや教育について深く考え，実践してきたふたりの研究者・活動家」（熊倉敬聡・高尾隆）に寄稿を依頼し，中平紀子氏を含めた 4 人での座談会とともに加えたものである。

熊倉氏は教育における「自由」の問題を語る。中平に対しても「彼の教育において『自由とは何か？』を生徒たちに，そして自らに問いかけ続けている，そこに究極的な<学び>が生まれることに賭けていた，と私は思う」と述べる。熊倉自身も大学生対象に「自由」を問う「セルフ・エデュケーション」的試みを実践した一人として，自らの経験をもとに「とがび」を解釈する。「中平も初めはもしかすると『不自由な』学校にあって，『美術』というますますマイナー扱いされる教科を逆転し，その起爆力＝『自由』を炸裂させ，局所的・瞬間的にしろ，生徒たちに『自由』の香りを嗅いでもらいたかっただけかもしれない。（中略）中平のさらなる願いは，その『自由』が『美術』から出て，学校の学び全体を変革する力となり，学校全体が，さらには地域社会までもが『とがび』と化すことではなかったか。」という言葉に彼の思いがまとめられている。熊倉は中平に強く共振し彼が「美術」や「アート」すらも一つの「不自由」になることを感じていたのでは，「自由に創る」ことは「美術」や「アート」の特権ではなく，もしかすると「美術」や「アート」の知識や技量を持たない人（とがびの中学生）であっても可能なのではないか，と想像するのである。

高尾氏は自身の専門を演劇教育やワークショップファシリテーションと説明し，「〇〇力の育成」という学校教育の教育目標について「大人は子どもに能力を付けさせてやれると考えている」と問題提起をする。子どもたちに〇〇力がないから，〇〇力を付けさせねばならないと学校で語る大人たちは，子どもたちが社会で行動し表現する機会を奪っているのだ。高尾は「芸術が社会において価値があるのは，リスクを取れるからだ」と述べる。芸術は高いリスクを取りながら子どもたちに何でもやってみることができる機会を与えることができ，かつそこは失敗することも織り込み済みだからこそ芸術の価値があるのだとも。そして本物の問題の重要性として，J.デューイの教育学的知見から本物の問題であるからこそ人間は自らの問題解決能力を発揮するのであり，一人でできないことをコミュニケーションという能力を使って協力すると述べている。つまり「とがび」の活動は生徒にとって本物の（「ガチ」の）問題として提示され，だからこそそこに教育を超えた学習が存在したのではないかとまとめている。

生前に中平との面識はなかったという二人の論客を迎え，中平の「とがび」という実践をもとに「教育における『自由』の問題」が語られる時，読者は自らの実践と対峙することになる。私たちは何を考え，何を求め，今，そしてこれから何をしようとしているのか。本書は美術教育を研究し，実践する者たちにとって「自省」「内省」を求める良書である。

最後に，中平千尋とはどんな人だったのか？美術教育に人生を捧げた人，「学校美術」の枠を打ち壊そうともがき続けた人，中学生と共に生きた人，常に「アート」とは何かを問い続けた人，・・・。「中平はきっと自分の感覚に素直に，当たり前のことをやっていたのだろう。しかしそのことで，周囲の大人たちにたくさんの違和感を与え，たくさん衝突もしただろう」と高尾氏は推察する。きっとそんなことばかりに嫌気が差すこともあったのではないだろうか。それほど私たちの生きている世界は美術教育に寛容ではない。それでも「当たり前」や「自由」を語る際に一歩引いてしまう感覚や，理想論として揶揄してしまうことが多くなりがちな現代社会において，それをまっすぐに，まっしぐらにやってのけたのが「とがび」であり，中平千尋だったのかもしれない。

読後にそれぞれの人が考えれば良いことであるが，私より短い人生の中で，自分に妥協せずにやりたいことをどうすればできるのかを問い続けた人＝中平がもうこの世にいないことを本当に残念に思う。

本書の中に中平氏の言葉と実践が多く収められているが，論文や特にブログに生の記録が残っている。美術教育を通して世界を変えていこうと思っている人に向けて，彼の志が引き継がれることを信じている。

※「とがびアート・プロジェクト 10 年の歴史-とがびアート・プロジェクト第 1 期：借り物アート期（2001～2004 年）-」（美術教育学）第 35 号）他。ブログ＊とがびアート・プロジェクト　https://togabi.exblog.jp/
http://www.voluntary.jp/weblog/RedirectServlet?npoURL=togabi

美術科教育学会通信 編集後記

学会通信担当/本部事務局　竹内晋平（奈良教育大学）

2019年４月より今期・本部事務局におきまして，合計９報の美術科教育学会通信の編集を担当させていただきました（第101～109号）。この３年間の編集業務のなかで取り組ませていただきましたのは，「ペーパーレス化」と「レイアウト変更」（巻頭言をのぞく二段組みの廃止）です。前者の「ペーパーレス化」により，学会通信の印刷・郵送に関するコストの削減と入稿から公開までの時間的な空白の解消を図ることができました。また，後者の「レイアウト変更」によって，特に図表を挿入する際の自由度を高くすることができたのではないかと考えております。これらの移行を円滑に進めることができましたのは，原稿執筆者および読者である学会員の皆様からのご協力があってのことと考えております。心より御礼申し上げます。

編集業務を最後に担当させていただく今号で「編集後記」を執筆するに当たり，毎号の刊行に伴う編集の手順等を紹介させていただきたいと思います。引継ぎ文書のような体裁となりますが今後，美術科教育学会通信に記事等を執筆していただく際のご参考にしていただければ幸いです。

１．ページ割の決定

刊行の約２か月半前より，本部事務局内にて紙面の計画を回覧し，ページ割を確定させていきます。毎号掲載している「巻頭言」「本部事務局より」に加え，必要に応じて随時掲載している「リサーチフォーラム予告」「リサーチフォーラム報告」「書評」「研究ノート」等がありますが，下記の記事等は通常であれば毎年度同時期の掲載となります。

【６月刊行分】　「理事会・総会報告」「収支決算書」「予算案」「大会報告」「学会賞選考報告」「学会賞受賞の言葉」「学会誌投稿案内」「研究部会報告」「大会予告（第一次案内）」

【10月刊行分】　「理事会報告」「大会予告（第二次案内）」

【２月刊行分】　「大会予告（最終案内）」

そして，３年に一度になりますが役員選挙を行う年度には６月刊行分で「選挙告示」を，10月刊行分で「選挙通知」を掲載します。上記以外に学会としての対外的な動向に関する記事，臨時に行われる理事会の報告等，学会員の皆様にお伝えすべき情報は刊行に間に合う限り掲載しております。ただし，「ペーパーレス化」以前に行っていた郵送による各種フライヤーの同封はできなくなりましたので，必要に応じて一斉配信メールに必要な情報（関連URL等を含む）を掲載する等の対応を行っています。

２．原稿執筆の依頼ととりまとめ，校正から入稿まで

ページ割が決定すると，刊行日の２か月前の時点で原稿執筆の依頼を行います。執筆期間は，刊行日の１か月前までです。その後は，１週間程度の著者校正をへて，記事ごとに別ファイルとなっているデータを統合し，本部事務局内で最終校正を行います。刊行の約１週間前には入稿できる状態のデータを整え，学会Webサイト上での公開日を調整するとともに，刊行を通知する一斉配信メールの準備を進めます。

３年間の編集業務を進めるなかで，多くの先生方にご支援いただきました。代表理事の山木朝彦先生からは常にその時に必要な記事についての情報をご提供いただくとともに，学会としての情報発信のあり方についてもご教示いただきました。総務担当副代表理事の佐藤賢司先生は，大会運営事務局や本部事務局支局等との間でいつも先回りしてご調整いただき，研究担当副代表理事の宇田秀士先生からは，学会誌投稿案内や学会賞等に関する情報を懇切にご教示いただきました。そして，事業担当副代表理事の大泉義一先生には，リサーチフォーラムや藝術学関連学会連合シンポジウム等に関する広報のタイミングについてご教示いただくとともに，学会通信のPDFファイルをWebサイトに毎回リアルタイムでアップロードしていただきました。本部事務局の渡邉美香先生，新井馨先生にはいつもお忙しい時期にもかかわらず，短時間での最終校正をご担当いただきました。大幅な遅れなく学会通信をお届けすることできたのは，先生方からのご支援があってのことです。心より感謝申し上げます。

本部事務局より

■ 第 44 回美術科教育学会東京大会の総会について

2021 年度総会は，大会終了後速やかにメール審議にて開催する予定です。会則で定めているように，総会は，学会の事業及び運営に関する重要事項を審議決定する学会の最高議決機関であり，会員の５分の１以上の出席がなければ成立しませんが，メール審議の性質上，委任状は作成いたしません。詳しくは大会後の一斉メールの内容をご確認ください。

■ 2022 会計年度までの会費納入をお願いします

「2022会計年度会費」は，2022年７月末日までに納入いただくようにお願いしています。３月の大会，リサーチフォーラム，学会誌刊行などの学会運営は，会員の皆様の会費により運営されています。

ご自分の各年度の年会費納入状況については，以下の「会員 情報管理システム」にログインすることにより確認が可能です。 https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/AAE

なお，納入状況に疑問がある場合には，下記の本部事務局支局アドレスにお問い合わせ下さい。

留意事項

次年度学会誌(第44号)への投稿並びに次年度大会(第45回大会）での口頭発表に際しては，投稿や申込みの時点で以下の２つの条件を満たしている必要があります。

①会員登録をしていること

②当該年度(2022会計年度）までの年会費を全て納入済みであること。

＊ 会費を２年間滞納した場合は，会員資格を失います。

会会費納入に関するお問い合わせ先：
（株）ガリレオ 東京オフィス　　担当者 和久津君子
[窓口アドレス] g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

■ 会費振り込み口座名・番号

会員の皆様に送付される振込用紙，郵便局にある払込用紙または銀行等からの振替により下記の口座に納入してください。

・銀行名： ゆうちょ銀行
・口座記号番号： 00140-9-551193
・口座名称： 美術科教育学会 本部事務局支局

通信欄には，「2022会計年度会費」等，会費の年度および会員ID番号を記入してください。また，ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は，下記内容を指定してください。

・店名(店番)： 〇一九(ゼロイチキユウ)店(019)
・預金種目： 当座 ・口座番号： 0551193

■ 大学院生等への会費減額措置(申請は毎年必要)

大学院生等は所定の手続きにより，年会費を半額(4,000 円)に減額する措置を受けることができます。会費減額措置を希望する大学院生等は，毎年，５月中に各自，申請手続きをすることになっています。申請しない場合は，減額措置を受けられません。未だ手続きがお済みでない方は，学会ウェブサイトをご参照ください。
http://www.artedu.jp/bbg4um0dy-8/#_8

なお，本制度は，大学院生等に対する経済的な支援を目的として設けられています。指導教員の先生は，申請者が，以下のいずれかに該当するか確認の上，申請させて下さい。

①勤務先を持たない「大学院生又は大学院研究生」である。

②勤務先を持つが，「長期履修制度」等を利用し，当該会計年度の間，無給の「大学院生又は大学院研究生」である。

■ 学会誌第 43 号に投稿され，掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様へ

学会誌第 43 号に投稿された会員で，掲載が許可された後，掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様にお知らせします。公費払いとは，大学研究費や科学研究費補助金などで支払うことをさしています。掲載負担金は，掲載ページ数が確定した時点（３月初旬を予定）で請求します。本部事務局支局からの請求書にしたがってお振込みください。ただし，各所属先が求める形式で請求書類を別途用意しなくてはならない場合は，そこから本部事務局支局と相談・交渉し始めたのでは，手続きが間にあわないことがあります。以下の留意点を読み，各所属先で前もってご確認いただき，相談・交渉するなど今から準備を始めて下さい。

＜留意事項＞

1．原則として，必要な書類は，投稿者自身で作成いただき，書類等に捺印が必要な場合は，本部事務局支局までお送りください。作成いただく書類は，本部事務局支局からの「振込負担 金請求書」以外の書類全てとなります。また，送付前に事前に以下までご連絡下さい。

2．投稿者自身による「立替払い」を原則と致します。

3．上記１，２を原則としますが，大学事務局と本部事務局支局が直接やり取りをしなければいけないケースがあります。この場合には，以下まで，手続きの概要，事務担当者の連絡先 などをメールで知らせて下さい。

美術科教育学会 本部事務局支局
〒170-0013 東京都豊島区東池袋２丁目 39-2-401
(株）ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 和久津 君子氏
［ 窓口アドレス］g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

迅速な手続きのため，ご確認及びご準備について，ご協力をよろしくお願いします。

■ 住所・所属等変更，退会手続き

住所，所属先等に変更のあった方は，すみやかに本部事務局支局までご連絡ください。退会を希望される場合は，電子メールではなく，必ず文書（退会希望日を明記してください）を郵送にて，本部事務局支局宛にお送りください。

あわせて，在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

■ 学会通信

年間３回の刊行（6月，10月，2月頃）を予定しています（No.105より，ペーパーレス発行に移行しました。希望者に対する紙媒体送付は，No.106をもって終了しています）。紙面には，学会からのお知らせのほか，会員の皆様からの原稿を随時掲載します。寄稿のご希望があれば，発行日の２か月前までにお知らせください。

美術科教育学会 本部事務局

■ 鳴門教育大学　〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学教職大学院
山木朝彦(代表理事) artedu@dc5.so-net.ne.jp　TEL 088-687-6485
■ 大阪教育大学　〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4－698－1 大阪教育大学美術教育講座
佐藤賢司(総務担当副代表理事／本部事務局長／規約等) ksato@cc.osaka-kyoiku.ac.jp　TEL 072-978-3732
渡邉美香(会計・名簿等) mwatanab@cc.osaka-kyoiku.ac.jp　TEL 072-978-3736
新井馨(会計・名簿等／本部事務局運営委員) arai-k49@cc.osaka-kyoiku.ac.jp　TEL 072-978-3738
■ 奈良教育大学　〒630-8528 奈良県奈良市高畑町 奈良教育大学美術教育講座
竹内晋平(学会通信等) shimpei@cc.nara-edu.ac.jp　TEL 0742-27-9038
■ 奈良教育大学　〒630-8528 奈良県奈良市高畑町 奈良教育大学美術教育講座
宇田秀士(研究担当副代表理事／学会誌編集委員長) udah@cc.nara-edu.ac.jp　TEL 0742-27-9223
■ 早稲田大学　〒169-8050 東京都新宿区西早稲田１丁目６－１ 早稲田大学教育・総合科学学術院
大泉義一(事業担当副代表理事／ウェブ) oizumi@waseda.jp　TEL 03-3208-1703

美術科教育学会 本部事務局 支局

■ （株）ガリレオ(www.galileo.co.jp)　学会業務情報化センター　〒170-0013　豊島区東池袋２丁目39-2-401
（ 担当者　和久津君子 ）　TEL: 03-5981-9824　FAX: 03-5981-9852

※　第９期 理事・監事は，上記の山木，佐藤，宇田，大泉，竹内，渡邉のほか，下記の17名が担当しております（50音順）。

・理事：　相田隆司（東京学芸大学），赤木里香子（岡山大学），上山浩（三重大学），奥村高明（日本体育大学），
金子一夫（茨城大学名誉教授），神野真吾（千葉大学），直江俊雄（筑波大学），中村和世（広島大学），
永守基樹（和歌山大学名誉教授），新関伸也（滋賀大学），西村徳行（東京学芸大学），
三澤一実（武蔵野美術大学），水島尚喜（聖心女子大学），三根和浪（広島大学），山田芳明（鳴門教育大学）
・監事：　新井哲夫（群馬大学名誉教授），山田一美（東京学芸大学）

以上